ドーピングに対する観客の認識と社会的規範の関連

1220453　國光　祐太郎

指導教員　日道俊之

研究背景

ドーピングは未だに発生しているものの、選手や大会運営、観衆の間でそれが黙認されている場合もある。こうした状況は社会への悪影響や人命、スポーツの価値の損失を招くため、対処の必要性があると考えられる。黙認という意思決定は、ある行為を周囲の他者が容認・正当化する雰囲気やモラルを認識することで行われ、こうした雰囲気やモラルで行動を動機づけるものを社会的規範という。選手や観衆の間でドーピングが黙認されている状況も、この社会的規範が関わっていると予想される。

研究目的

ドーピングに対する観客の態度に、社会的規範のうち記述的規範・命令的規範のどちらがより強く影響するかを検証する。

調査・分析方法

qualtrics でウェブ調査を行った。回答者を 3 つの条件 (統制条件・記述的規範条件・命令的規範条件）に分け、各条件で異なるシナリオを読んでもらった。その後、条件ごとで規範認知の程度、ドーピングへの拒否度・許容度、参加者属性、全般的な普段の拒否度・許容度を測定し、回答に関して条件間の差を分析した。

分析結果

操作チェックの結果、シナリオの提示により命令的規範をうまく喚起させられていなかった。仮説検証の分析である *t* 検定では、シナリオ提示時の拒否度・許容度に関して条件間での差はなかった。続く分散分析では、全般的な拒否度・許容度に関して条件間で差はなかった。条件ごとの重回帰分析ではシナリオ提示時の拒否度・許容度に対し概ね命令的規範が影響し、一部性別も影響していると示された。

考察・結論

シナリオ提示時の拒否度・許容度に対する分析結果を見ると、記述的規範の認知と拒否度・許容度の変化に関連性がない、あるいは規範を認知させられていないと示唆された。命令的規範に関しては規範を認知させられず、重回帰分析の結果を加味しても拒否度・許容度に対する有意な影響は見られなかった。そのため、命令的規範認知と拒否度・許容度との関連は明らかにできず、2 つの条件シナリオともに、より適したシナリオ設定が求められる。